

釧路総合振興局記者クラブ配付資料

報道発表資料の配付日時 令和5年1月5日(木) 15:00

発表項目	令和4年度(2022年度)第1回タンチョウ越冬分布調査の結果について																					
記者レクチャーのお知らせ	(実施日時)	発表者																				
	月 日 () 時 分	発表場所																				
概要	<p>絶滅危惧種タンチョウの越冬分布・規模の把握等を目的として毎年実施している本調査について、次のとおり、今年度1回目の調査結果をお知らせします。</p> <p>1 調査実施日時等</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>令和4年度(2022年度)第1回</th> <th>令和3年度(2021年度)第1回(参考)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>調査日時</td> <td>12月2日(金) 8:50~9:10</td> <td>12月3日(金) 8:50~9:10</td> </tr> <tr> <td>調査区域</td> <td>10振興局 46市町村</td> <td>9振興局 41市町村</td> </tr> <tr> <td>調査箇所</td> <td>計419箇所(野生416箇所)</td> <td>計350箇所(野生347箇所)</td> </tr> <tr> <td>調査協力者</td> <td>小・中学生など計406人</td> <td>小・中学生など計418人</td> </tr> </tbody> </table> <p>2 タンチョウ確認羽数</p> <table border="1"> <tbody> <tr> <td>令和4年度(2022年度)第1回結果</td> <td>合計972羽(成鳥818、幼鳥98、不明17、飼育個体39) うち野生個体933羽(釧路668、十勝198、根室50、オホーツク0、宗谷2、日高6、胆振6、空知3、石狩0、後志0)</td> </tr> <tr> <td>令和3年度(2021年度)第1回結果</td> <td>合計937羽(成鳥829、幼鳥72、不明0、飼育個体36) うち野生個体901羽(釧路724、十勝135、根室15、オホーツク9、日高10、胆振3、空知3、石狩2)</td> </tr> </tbody> </table> <p>3 今回の調査結果に対する有識者コメント概要 (有識者 専修大学北海道短期大学 名誉教授 正富宏之)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・確認羽数について、前年度同期より32羽(野生個体)多い。 ・特に十勝・根室管内において、生息確認地区及び確認羽数が増加しており、釧路管内での給餌量削減などの影響の可能性も否定できない。 ・個体数増加に伴い、分布域を広げつつあり、幅広く環境教育としての調査参加を呼びかけるべき。 				令和4年度(2022年度)第1回	令和3年度(2021年度)第1回(参考)	調査日時	12月2日(金) 8:50~9:10	12月3日(金) 8:50~9:10	調査区域	10振興局 46市町村	9振興局 41市町村	調査箇所	計419箇所(野生416箇所)	計350箇所(野生347箇所)	調査協力者	小・中学生など計406人	小・中学生など計418人	令和4年度(2022年度)第1回結果	合計972羽(成鳥818、幼鳥98、不明17、飼育個体39) うち野生個体933羽(釧路668、十勝198、根室50、オホーツク0、宗谷2、日高6、胆振6、空知3、石狩0、後志0)	令和3年度(2021年度)第1回結果	合計937羽(成鳥829、幼鳥72、不明0、飼育個体36) うち野生個体901羽(釧路724、十勝135、根室15、オホーツク9、日高10、胆振3、空知3、石狩2)
		令和4年度(2022年度)第1回	令和3年度(2021年度)第1回(参考)																			
	調査日時	12月2日(金) 8:50~9:10	12月3日(金) 8:50~9:10																			
	調査区域	10振興局 46市町村	9振興局 41市町村																			
	調査箇所	計419箇所(野生416箇所)	計350箇所(野生347箇所)																			
調査協力者	小・中学生など計406人	小・中学生など計418人																				
令和4年度(2022年度)第1回結果	合計972羽(成鳥818、幼鳥98、不明17、飼育個体39) うち野生個体933羽(釧路668、十勝198、根室50、オホーツク0、宗谷2、日高6、胆振6、空知3、石狩0、後志0)																					
令和3年度(2021年度)第1回結果	合計937羽(成鳥829、幼鳥72、不明0、飼育個体36) うち野生個体901羽(釧路724、十勝135、根室15、オホーツク9、日高10、胆振3、空知3、石狩2)																					
参考	今年度2回目の調査は、令和5年1月24日(火)に実施する予定です。																					

報道(取材)に当たってのお願い	第1回調査では、地元の小・中学校の児童、生徒をはじめ多くの方々の御協力をいただいております。また、本調査は、平成29年度から北海道と包括連携協定を締結している日本航空株式会社(JAL)と協働で実施していますので、積極的な報道をお願いします。		
他のクラブとの関係	同時配布 同時レク	北海道庁、十勝、根室(総合)振興局記者クラブで配布します。	

担当(連絡先)	<ul style="list-style-type: none"> ・環境生活部自然環境局自然環境課 担当：橋本(調査全体) TEL：011-204-5203(ダイヤルイン) ・釧路総合振興局保健環境部環境生活課 担当：木村、川島(釧路管内) TEL：0154-43-9150(ダイヤルイン) 		
---------	---	--	--

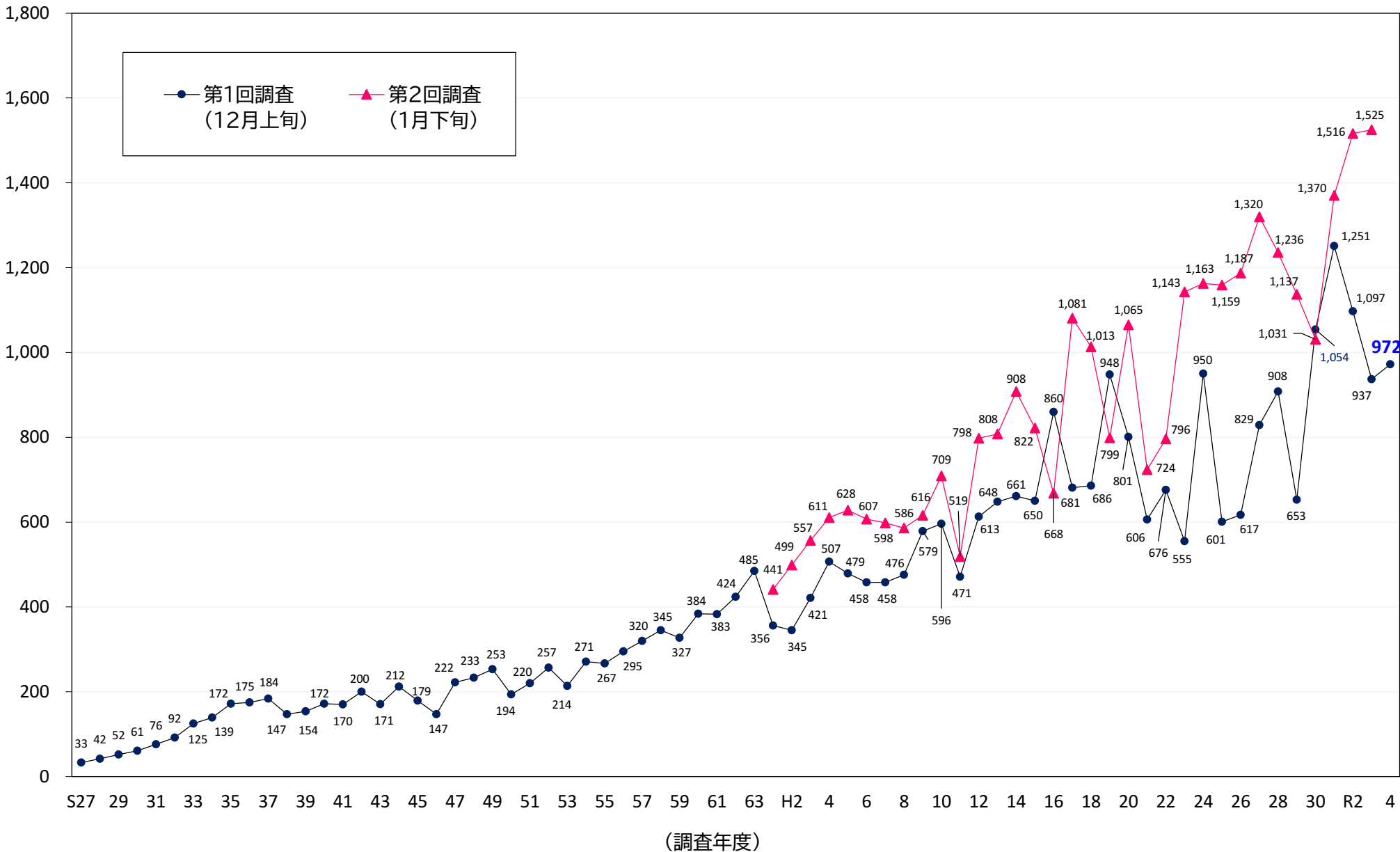
7 タンチョウ確認羽数(市町村別)

(羽)

市町村	令和4年度第1回				令和4年度第2回
	成鳥	幼鳥	不明	計	
釧路	釧路市	31	11	0	42
	釧路市阿寒町	22	5	0	27
	釧路市音別町	51	5	5	61
	釧路町	5	2	0	7
	厚岸町	4	1	0	5
	浜中町	49	5	0	54
	弟子屈町	24	4	0	28
	標茶町	138	11	1	150
	鶴居村	242	27	11	280
	白糠町	11	3	0	14
十勝	帯広市	2	1	0	3
	中札内村	0	0	0	0
	更別村	0	0	0	0
	大樹町	85	5	0	90
	広尾町	4	0	0	4
	幕別町	51	3	0	54
	池田町	6	2	0	8
	豊頃町	26	3	0	29
	浦幌町	4	1	0	5
	音更町	4	1	0	5
	上士幌町	0	0	0	0
	足寄町	0	0	0	0
	陸別町	0	0	0	0
	本別町	0	0	0	0
	鹿追町	0	0	0	0
根室	根室市	8	0	0	8
	別海町	17	1	0	18
	標津町	2	2	0	4
	中標津町	17	3	0	20
オホーツク	網走市	0	0	0	0
	小清水町	0	0	0	0
	斜里町	0	0	0	0
	大空町	0	0	0	0
宗谷	豊富町	2	0	0	2
	浜頓別町	0	0	0	0
	枝幸町	0	0	0	0
	幌延町	0	0	0	0
日高	日高町	5	1	0	6
	新冠町	0	0	0	0
胆振	むかわ町	2	0	0	2
	厚真町	2	0	0	2
	安平町	0	0	0	0
	苫小牧市	2	0	0	2
空知	長沼町	2	1	0	3
	栗山町	0	0	0	0
	由仁町	0	0	0	0
石狩後志	千歳市	0	0	0	0
	小樽市	0	0	0	0
小計		818	98	17	933
飼育個体		34	5	0	39
合計		852	103	17	972

タンチョウ越冬分布調査結果の推移(飼育個体含む)

(羽)



令和4年（2022年）12月26日

令和4年12月2日実施のタンチョウ越冬分布調査結果について

正富宏之

今年12月2日に行われた令和4年度第1回タンチョウ越冬分布調査結果について、これまでと同様に、動物園および類似施設の飼育個体を除いた野生個体のみを対象として、コメントを記しておきたい。

I. 分布域

A) 今年の状況

調査が行われたのは空知振興局（以下振興局を省略）、石狩、後志、胆振、日高、宗谷、オホーツク、十勝、釧路、根室の10管内で、前年より1局（後志）多い。このうちタンチョウが目撃されたのは、後志、石狩、オホーツクを除く7管内である。

調査を行った市町村は7(5)市（以下カッコ内は前年の数値・記載）、36(35)町、3(1)村の計46(41)自治体で、そこに416(347)カ所の調査地区を設け、そのうち184(141)地区でタンチョウが目撃された。従って、調査地区の中でタンチョウが記録された地区の割合は44.2%を示し、4(4)市、21(24)町、1(1)村の計26(29)自治体で目撃され、調査対象自治体の56.5（70.7）%で生息が確認されたことになる。

確認地区数が最も多かったのは釧路管内の104（89）カ所で、全確認地区数の56.5(63.1)%を示し、次いで十勝54(37)カ所で29.3(26.2)%、根室19(5)カ所で10.3(3.5)%の順で、この3者で全体の96.2(92.9)%を占めた。

また、市町村別の確認地区数は鶴居村が最も多い35（38）地区で、全確認地区数の19.0（27.0）%を占めた。次いで釧路市が29(24)地区で15.8(17.0)%を示し、釧路の標茶町が19(10)地区で10.3(7.1)%、十勝管内の幕別町が18(7)地区で12.8(5.0)%、大樹町が15(9)地区で8.2(6.4)%、豊頃町が12(7)地区で6.5(5.0)%などとなる。

B) 前年（令和3年）との比較と今年の特徴

タンチョウの生息が確認された振興局数は昨年が8局であったの対し、今年石狩管内の記録が調査日に得られなかったため、一昨年と同じ7局に留まった。しかし、目撃記録が無いとされた管内で、複数個体が調査日に明らかに生息していた地域が、調査対象地外とされていた例もあり、実質は前年同様8局での生息があったとみてよい。

今年の分布域に関する特色の一つは、確認地区数が前年を43カ所も上回り、調査地区数に対する割合も3.6ポイント高い値を示した点である。特に十勝管内で上述のように17地区、根室管内で14地区の増加を示した。しかし、これは前年から今年にかけて分布域が両管内で急拡大したことを示すものではない。つまり、この両地区では、少数で分散して暮らす個体が近年次第に多くなり、従来の調査対象地だけでは拾いきれず、精度改善のため今年は十勝管内40地区、根室管内30地区を新たに対象地としたことと関連する。

反面、釧路管内では調査地区数が前年より16カ所減少したのに、確認地区数

は前年を15ヵ所上回った。これは年ごとに環境条件（餌の分布、人の干渉、気候など）は異なり、それによりタンチョウの生息場所が変わるので、前年は既存の調査地区での記録が極端に少なかったためと考えられ、こうした状況については、羽数の項で少し触れたい。

ともあれ、十勝・根室両管内での調査地区数増大に伴う確認地区数増加により、相対的に釧路における確認地区数の割合は低下したものの、直近5(2018-2022)年間の確認地区数では2020年に次いで2番目を示し、大きな増減はない。また、全道における最近4(2018-2021)年間の確認地区数は141-150ヵ所なのに対し、今年は30ヵ所以上も多いが、これも十勝・根室両地区での調査地区数変更に伴うことが大きいと言える。従って、調査時点の振興局レベルにおける分布は、十勝・根室管内での緩やかな増加と、特に2015年以降の宗谷・胆振・石狩・空知・日高・オホーツク管内等での新たな増加に注目しておくべきことを示唆している。

II. 羽数

A) 今回の記録羽数

目撃された羽数は933(901)羽(以下カッコ内は前年の数値)で、そのうち今年生まれの幼鳥が98(72)羽とされる。しかし、総数の中には成鳥・幼鳥不明の個体が17羽含まれるため、実際の幼鳥数は98羽を若干上回るかもしれない。

管内別の羽数は配布資料の如くで、各管内の羽数割合は多い順に、釧路71.6(80.4)%、十勝21.2(15.0)%、根室5.4(1.7)%、日高0.6(1.1)%、胆振0.6(0.3)%、空知0.3(0.3)%、宗谷0.2(0.0)%となり、釧路・十勝・根室の3管内で全体の98.2(97.1)%を占める。

調査を行った46市町村別に、目撃された羽数を多い順に11位まで挙げると、鶴居村280(320)羽、標茶町150(118)羽、釧路市130(214)(このうち阿寒町27(82)羽、音別町61(86)羽)、大樹町90(67)羽、幕別町54(14)羽、浜中町54(24)羽、豊頃町29(19)羽、弟子屈町28(7)羽、中標津町20(6)羽、別海町18(6)羽、白糠町14(15)羽となっている。

上記の羽数を自治体別の分布割合で示すと、鶴居村が30.0(35.5)%、次いで標茶町16.1(13.1)%、釧路市が13.9(23.8)%で、11位までの合計数が目撃数全体の92.9(95.4)%を含むことになる。また、11位までの自治体で記録された羽数を振興局別に集計すると、釧路管内が6自治体656(722)羽で70.3(80.1)%が、十勝管内が3自治体173(119)羽で18.5(13.2)%、根室管内が2自治体38(12)羽で4.1(1.3)%となる。

なお、今年は98羽の幼鳥が確認され、総数(成鳥・幼鳥不明数を除く)に対する割合は10.7%を示した。振興局別では、釧路が74羽で管内記録数(成鳥・幼鳥不明数を除く)の11.4%、十勝が16羽で8.1%、根室が6羽で12.0%、その他が2羽で11.8%となる。市町村の総目撃羽数の多い順に幼鳥数の占める割合(対象自治体の成鳥・幼鳥不明数は除く)を挙げると、鶴居村が幼鳥27羽で村内記録数の10.0%を示し、次いで標茶町11羽で7.4%、釧路市21羽で16.8%、大樹町5羽で5.6%、浜中町5羽で9.3%、幕別町3羽で5.6%、豊頃町3羽で10.3%、弟子屈町4羽で14.3%、中標津町3羽で15.0%、別海町1羽で5.6%、白糠町3羽で21.4%などである。

B) 前年との比較を含めた今回の特徴

今回の調査で目撃されたタンチョウは933羽で、前年より32羽多いが、過去

最多を記録した2019年よりは282羽少ない。

振興局別に確認羽数を前年と比べると、釧路で56羽少ないのに対し、十勝では63羽、根室では35羽多く記録されたのが特色である。前年に十勝・根室の両管内で記録された羽数に対し、今年は十勝で約1.5倍とかなりの割合で増え、2018年に記録された196羽を超えて過去最多を記録し、根室は2018年の過去最多に1羽届かなかったものの、前年比では3.3倍と大幅な増加を示した。

両地区の確認羽数増加要因の一つは、上記(I-B項参照)でも触れたように、調査地区数を増やしたことにある。この第1回調査では、その年の生息環境の状況に応じてタンチョウは暮らしの場を選択するため、記録数は大きく左右される。つまり、調査日ころに温暖で、残存作物も含めて餌が十分とれるなら広く分散して暮らし、寒さが進み降雪などもあれば、餌のある給餌場を目指すなど、年によりタンチョウが越冬地へ移動する時期に“ずれ”が起き、それが12月の確認羽数に影響する。今年の調査時は各地マイナス気温であったものの、昨年や一昨年に比べて調査直前の11月下旬まで気温が高く(例えば、十勝の大樹町や根室の中標津町では、日平均気温が前年・前々年より2-4℃ほど高い)、そのためタンチョウがまだ広く分散して暮らしていたため、全体を十分把握し得なかったことが、実際の生息数より確認数が大きく下回った一因と思われる。

他方、釧路管内で総確認羽数は前年を下回っており、十勝・根室両地区の増加に伴う釧路地区での減少という可能性もないとは言えないが、十勝・根室両地区の増加は既存生息個体を新たに発見したことが大きいと思われる。従って、釧路管内にある三大給餌場(阿寒・下雪裡・中雪裡)での給餌量削減などによる集中抑制の影響で、調査地区以外での存在が多くなっている可能性も否定できない。従って、釧路管内でも調査区数の増加とともに、多数個体の多い地域であることを考慮して、調査協力者数を増やすことも必要であろう。ともあれ、調査時点においても釧路管内にタンチョウが集中している点は、これまでと同様に変わりはない。

なお、今年の繁殖状況を示す幼鳥割合は、今回の調査では全体の1割前後の値を示し、今のところ通常の状態と想定される。しかし、今回の総確認羽数が、推定されている現在の個体数の半数ほどに留まるため、より確実な繁殖状況は、第2回の調査結果をもとに判定されることになる。

III. 提言

A) 調査地区数の増加

今年は特に十勝と根室の両管内において、調査地区数を大幅に増やすことにより、生息確認地区数並びに確認羽数増加が認められ、分布の実態により近い結果が得られたことに対し、計画作成・実行された道の担当職員の方々にまず謝意を表したい。また、調査地区数が大幅に増えたにも拘らず、調査協力員の数は従来と変わらないので、実際に調査にあられた方々の労を多としたい。

しかしながら、目撃羽数が実態よりもかなり低いことを考えると、調査方法は改善の余地があると思われる。今年のように分散個体が多いと思われる年にタンチョウをなるべくもれなく見つけるには、調査地点を可能な限り多く設定する必要があり、それが分布状態と羽数の確認の両面で極めて有効と言える。

そのため、十勝・根室のみならず、タンチョウの生息が想定される全ての振興局で調査地区数をさらに増やし、それに見合う調査協力者を確保するのが最も単純な方法であるが、容易に事は運ばないかもしれない。とすると、それを

補う手法として、タンチョウが調査時期に連続して出現する場所について、個人ないし機構・組合・団体等を通じて事前に情報を集める工夫とか、その他の様々な情報収集方法の検討も必要であろう。

ただ、次回からの調査方法の再検討が不可欠と思われる個所もある。即ち、道東の管内で調査日の調査協力者がゼロで、事前の情報収集も不十分であったためか、調査対象地区から除外され、結果としてタンチョウの生息記録が欠落したと思われる事例がある。同管内には野鳥やタンチョウについて情報をお持ちの方も多くおられるゆえに、早急な改善を望んでおきたい。

B) 環境教育としての事業参加

これについては、繰り返し提言してきたことであるが、再度記しておきたい。つまり、タンチョウは個体数増加に伴い分布域を広げつつあり、単に釧路市の阿寒町や鶴居村だけが、調査参加可能な地域なのではない。各地域における学校・教育機関・関係者が郷土の自然理解のための手がかりとして、調査参加を有効利用していただきたい。また、今回の調査結果を報道されるメディアの方にも、単に羽数や分布のことのみならず、この調査の環境教育的意義のあることを、少しでも理解していただけるような報道をお願いしたい。